

# AI時代の会計／財務分析 —会計研究の新たなパラダイム—

矢澤 憲一

## 目 次

- |                   |                          |
|-------------------|--------------------------|
| 1. はじめに           | 4. 監査人／アナリストはAIに代替されるのか？ |
| 2. ビッグデータ、AI、会計研究 | 5. LLM革命による衝撃            |
| 3. AIを用いた会計／財務分析  | 6. おわりに                  |

データとAI技術の躍進により、機械学習を用いた企業評価、証券分析が進展している。本稿では、主として海外の先行研究をレビューし、AI監査人やアナリストが場合によって人間の監査人やアナリストを上回る能力を発揮することを明らかにしている。一方で、人間と機械はそれぞれの独自の長所と短所を持ち、これらを組み合わせることで、より優れた予測につながる可能性も示唆される。

## 1. はじめに

「人工知能（Artificial Intelligence、AI）」の定義は広いものの、一般的には「人間の知的行動を機械によって実現すること」とされる。AIは機械学習、深層学習、自然言語処理、画像認識、音声認識、ロボティクスなどの技術によって実現される。本稿では、特にAI技術の中でも機械学習、深層学習、そして自然言語処理に焦点を当てる（注1）。主として英文の先行研究に焦点を当て、これらの技術が会計／財務分析の世界にどのような影響を与えてきたのかを概観する。さらに、

AI技術の発展によって人間（企業人、投資家、監査人、その他利害関係者）と機械の関係はどのように変化するののかについても考察したい。

## 2. ビッグデータ、AI、会計研究

### (1) AI小史

AIの歴史を簡単に振り返ると、1950年代から60年代前半にかけてルールベースのAIが主流であったが、60年代後半にAIの冬と呼ばれる停滞期を迎える。その後、1980年代にエキスパートシステムが登場し、1990年代から2000年代にか



矢澤 憲一（やざわ けんいち）

青山学院大学経営学部教授。一橋大学大学院商学研究科博士課程修了、博士（商学）。2005年4月青山学院大学経営学部専任講師、2012年9月から2013年8月までThe University of New South Wales（オーストラリア）客員教授、2017年4月より現職。主な業績として、“The Relationship between Audit Team Composition, Audit Fees and Quality”（*Auditing: A Journal of Practice and Theory* 36（3）、2017年、S. Hossain and G. S. Monroeと共著）などがある。